

アイドルが文学を生み出す時代

———— 『オルタネート』と『推し、燃ゆ』

図書館係 阿部健治

図書委員の紹介にもある通り、2021 年の本屋大賞ノミネート作品が発表された。この 10 作は書店員さんたちが特に読んでほしいと公的に表明（投票）した本のベスト 10 であり、それぞれに面白さのあるものだと思うが（足女図書館に揃えたので是非読んでください）、今回はその中から**「アイドル」が生んだ文学**ということで、**加藤シゲアキ『オルタネート』と宇佐見りん『推し、燃ゆ』**について語りたい。

まずは加藤シゲアキの『オルタネート』。加藤はアイドルグループ「NEWS」の一員であるから、これは文字通り「アイドル」が生み出した（かいた）作品である。「NEWS」は当初は9人もいたそうで、山P（山下先生のことじゃないよ）や関ジャニの錦戸くんなどもいたらしい（近いところでは、手越くんもいたよね）が、今は加藤くんと小山くんと増田くんの3人だけになっているらしい。筆者は「アイドル」などには疎いが、SMAPや嵐やTOKIOのメンバーなら全員言えるし、小山くんと増田くんも顔はわかるのだが、加藤くんはテレビでも見たことがない。とすると、「NEWS」の中でもその存在は地味な方なのかもしれないが、小説家（エンタメの）としては、間違いなく指折りの人（アイドルとしての序列よりはたぶん上）だと思う。この作品もこのまますぐにテレビドラマの原作になってもおかしくない。登場人物のキャストは誰がいいかなあ、などと思わず想像させるくらいの力がある。

本作成功のカギは、やはり「オルタネート」という「**高校生向けのマッチングアプリ**」を構想したことにあるだろう。マッチングだから向こうには未知の相手がいるわけで、もちろん危険性も感じる（だからマッチング自体は敬遠する高校生も多いとも描かれる）が、同時に期待感も大きい。しかし、このアプリは高校生しか使えないので、大人にだまされる危険はかなり軽減されている。また、自分は発信しないでオブザーバーのように参加するのも可能なので、それで楽しんでいる者も多い。この辺の設定はとても巧みであり、エンタメ作家としての熟練性を感じる。

この作品には主人公格の人が三人いるのだが、そのうちの一人風津（なつ）は両親の不仲（「マッチングの失敗」ということ）を見て、その轍は踏みたくないと心に決め、自らの遺伝情報まで「オルタネート」に提出して「Gene Match（遺伝子的な相性診断）」にまで挑む。これはいかにも実用化しそうな話なので、筆者はぞぞっと寒けを感じた。

足女生の諸君、こういうの、どう思いますか。

AIには学習機能があるので、意味のある情報が揃っていれば、ある程度適切なマッチングをずる可能性が高い。しかし、それを黙って受け入れていいのだろうか。相手とは合わないところを発見し、それをもとに自らを振り返ったり、相手に働きかけたりしてそのギャップを埋めようと努めることが「生きる」ということなのではないか。更に言えば、遺伝子的に相性のよいマッチングが多くなされることはヒトという種にとって、あるいは全生態系（あるいは地球）にとって本当によいことなのだろうか。こんなことを考えさせてくれるだけでもこの作品

は価値がある。

作者はもちろん風津の行為を手放しで肯定していわけではない。ではどうとらえているのか。それは是非結末まで読んで諸君自身で確かめてみてほしい。

主人公格の残りの二人のうち、尚志（なおし）は風津と対極的な人物として設定されたものだ。高校を中退したため「オルタネート」も使えなくなった。そのため、彼は自分の「感覚」だけを頼りに、常に体当たりで自分の人生を切り開いていく。そしてもう一人の主人公格、ヒロインとも言うべき蓉（いるる）は名前の通り「受け入れる性（さが）」なのだろう。親や友や恋人とは共感と同時に反発も感じるのだが、もがき苦しみながらもそれを乗り越える。穏やかそうに見えるが芯が強い。このキャラクターもとても魅力的だ。この独立した三つの話が最後に微妙につながっていくラストには新鮮みも感じた。楽しめる作品だと思う。

宇佐見りんの『推し、燃ゆ』のは、より「アイドル」の本質に迫った作品だ。

「推し」とは個人的に応援しているタレントのことを指すらしい。我々の世代だってみな好きなタレントはいたが、ここで描かれる「推し」は、その「のめり込み」の度合いが全く異なる。ある意味、「推し」を「推すこと」が主人公あかりの**全て**なのだ。彼女は何をやっても姉のようにうまくはできず、当然勉強も苦手だし、「推し」を応援するために目一杯やっているバイトでも失敗ばかりである。そういう彼女が、「推し」に関しては、文学研究者が作家の日記の隅々まで読むような手つきで、彼に関するあらゆる情報を集めようと努め、誰も気づかないようなことを発見してブログに書く。すると、それは「推し」仲間の絶賛を浴びたりするのだ。

今の若者は幼い事から「自分らしく」生きることを強制される。しかし、「社会的にも価値のある自分らしさ」を持っている者などそうそういるはずがない。だから 多くの若者はそういう「自分さがし」にととても疲れているのだ。

「アイドル」は、個人的な思いを寄せることもできる上に、多くの者に支持される「**社会的価値をも有する**」から、それを自らの一部とし、自分のアイデンティティの拠り所とするには、最もふさわしいものだと言うこともできる。**主人公あかりは「推し」を自らの「背骨」だと言う**。彼女は「推し」に対して自己をアビールしようとしないうし、彼からの返答も求めない。それこそ「推し」が他者でなく自分の一部だということを証明するものであろう。

「アイドル」はもともと「偶像」や「理想」、あるいはそこから派生した「幻」などの意味を持つ。あかりの一部をなす「推し」は、文字通りこういう意味での「アイドル」なので、彼が備えている（はずの）肉体は、時として邪魔になることさえあるのである（あかりは彼が歌ったりダンスをしている姿は見たいが、彼の匂いや息づかいを感じたいわけではないのだ）。

翻って考えれば、人が自らのアイデンティティとするものは、多くの場合、イデアルな（「心」のように形がなく理念化した）ものである（ボディビルダーのように肉体そのものが「自分」だという人もあろうが少数だろう）。人は誰でも肉体に縛られて生きているのだが、真に大切なのはその部分ではない。

「アイドル」は「アイドル」でいるうちは、**自分という存在の多くを公的空間に差し出している**わけで、それについてのファンのアクセス（よほど不当なものでなければ）を絶対に拒否することができない。しかし、彼が「アイドル」でなくなった瞬間から、それがどんなに心のこもったものであろうが、ファンからのアクセスは完全に拒絶される。

あかりの「推し」であった上野真幸はファンを殴って炎上し、やがて「アイドル」であることをやめて「**人**」になった。そうになると、あかりの最も大切な部分は自然消滅せざるを得ない（虎になった李徴の中に残された「人間」のようなものだ。どんなに身をよじって嘆き悲しんでもどうにもならない。）。「推し」や、それを可能にするSNSにすがるなければ生きていけない若者の姿を見事に描き出した本作は、まさに「現代の文学」と呼ぶにふさわしいものであろう。